

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2012年10月18日放送

「第28回日本臨床皮膚科医会① 大会を終えて」

津田皮膚科クリニック

院長 津田 眞五

はじめに

2012年4月21日、22日に、第28回日本臨床皮膚科医会(日臨皮)総会・臨床学術大会を、福岡市のホテルニューオータニ博多で開催致しました。本大会が九州で開催されるのは、第6回大会、第17回大会に次いで3回目です。

大会期間中の福岡市は強風注意報が出る程の悪天候でしたが、幸い全国各地や海外より1377名という多数の参加者があり、盛会裏に無事終了することが出来ました。この場をお借りしまして、ご参加頂いた会員を始め、各講演の講師・座長の先生方、日臨皮本部、および準備を進めて頂いた日臨皮九州ブロック、九州各県の皮膚科医会、学会運営事務局の方々のご尽力に、会頭として厚く御礼申し上げます。

大会のテーマと総会について

さて開催にあたり、今回の大会のテーマを検討しました。皮膚科診療においては、皮疹を詳細に観察してその病態を考え、必要に応じて病理組織の検討を含む諸検査を行い、これらを総合して診断し治療をするのが基本ですが、さらに日々進歩する皮膚科学に関する最新の知識や技術の習得に努めることは、皮膚科専門医としての責務であります。

一方、日臨皮の活動目標の一つに、皮膚科医としてのidentityの確立があります。医療制度は国民合意のルールであり、現行制度に従うのは当然ですが、社会情勢の変化のために改変が必要であれば、それらを指摘するのも大切です。

以上の2点は、日臨皮の今後の活動姿勢を推進する上で重要と考え、そのコンセプトを盛り込んで、メインテーマを「基



本に忠実・変化に対応～よりよき皮膚科診療をめざして」としました。

4月21日に行われた日臨皮総会では、若林正治会長が医会の現状、および今後の活動方針を述べられました。さらに医会を構成する各委員会より事業報告や今後の計画案が提示され、協議事項はすべて承認されました。

臨床学術大会について

続いて開催された臨床学術大会についてご報告いたします。

2012年は2年に一度の診療報酬改定の年に当たるため、迫井正深厚生労働省企画官、鈴木邦彦日本医師会常任理事、若林正治日臨皮会長に、「皮膚科よりみた2012年度診療報酬改定の評価」の内容でご講演をお願いしました。いずれの講演でも、切り口は異なるものの、今回の診療報酬改定の主旨や経緯が詳しく述べられ、今回の改定は社会保障と税の一体改革に示された医療の将来像に向けた第一歩という流れもあり、今後の診療報酬改定の方向性を考える上で極めて有益でした。

さらにこれに関連して、二木 立日本福祉大学副学長による「これからの医療改革と医療費の財源選択」と題した特別講演を企画しました。論客で知られる二木教授のお話は期待通りの内容で、大変興味深く拝聴しました。

さて臨床学術大会では、特別講演、教育講演、シンポジウムを始め、モーニング・ランチョン・イブニングセミナーを多数企画しました。全国より著名な皮膚科医をお招きし、各種皮膚疾患に関する **up-to-date** な話題をお話しして頂いたので、参加した多くの会員にとって、またとない研鑽の機会になったものと思われまます。このうち、いくつかのご講演を紹介致します。

江良沢実熊本大学発生医学研究所教授による「iPS細胞研究の進展」は、大変興味深い内容の特別講演でした。iPS細胞は臨床皮膚科医にも極めて重要なテーマで、特に患者特異的 iPS細胞は、難病の病態解明、細胞移植治療開発、新薬探索などの領域で、これまでにない成果が得られるものと期待されています。会場では熱心にメモを取る会員も多く、また活発な質疑応答が交わされていました。

一方、今回の総会が九州で開催されるのを機会に、「九州地方に多い皮膚疾患」と題するシンポジウムを企画しました。成人T細胞性白血病/リンパ腫、**Vibrio vulnificus**感染症、スポロトリコーシス・黒癬、沖縄の生息動物による皮膚障害などが、九州・沖縄の演者より提示され、これらの皮膚疾患の病態や治療について、全国からの参加者とともに再認識しました。

さらに講演は九州に留まらず、海外からの招請講演も企画しました。すなわち九州は地理的に東アジアに近接していることから、韓国、中国、インドネシア、タイより著名な皮膚科医をお招きして、各国にみられる興味深い皮膚疾患を提示して頂くというコンセプトで、国際シンポジウムを開催しました。

感染症に関連する話題が多い中、大洪水に見舞われたタイの救援活動に参加した現地

皮膚科医の行動は、東日本大震災における本邦皮膚科医の活躍と重なり、極めて印象深い内容の講演でした。

また東アジアに位置する九州は、古くより中国や東南アジアとの交易や人々の交流も盛んでした。そこで九州、特に博多を中心に伝承された美術品や風習について、九州国立博物館の臺信 祐爾文化財課長に、「九州の美と歴史」と題する文化講演を、大会初日の夕刻にお願いしました。多くの史実を知るとともに、早朝からの学術講演で疲れた頭には、新鮮な清涼剤のような文化講演でした。

また九州には真菌の研究をライフワークとされている先生も多く、その集まりである九州真菌懇話会が開催75回を迎えました。それを記念して、本大会との共催形式で九州大学の占部治邦名誉教授に、「私の歩いた道—真菌症」と題するご講演をお願いしました。

長年にわたる先生の研究成果を拝聴しましたが、会場は満員で立ち見の方も多く、先生に教えを受けた方々がご講演の内容を一言も聞き漏らすまいと、熱心に聞き入っておられるのが印象的でした。

さらに、「アレルギー性皮膚疾患における抗原検索とその留意点」「難治性潰瘍の治療と工夫」「スキンケア」「ウイルス性発疹症の診断と検査」「医療と法」「皮膚病理組織学」「紫斑症の診方、考え方」などの教育講演、「皮膚科診療に役立つ他科の知識」「蕁麻疹・中毒疹最近の話題」「社会に貢献する皮膚科医」「皮膚科臨床医の現状と未来への展望」「美容皮膚科最近の話題」「エキスパートに学ぶ難治性皮膚疾患のベスト治療」「日臨皮における学校保健への取り組みと課題」などのシンポジウムが開催されました。いずれの講演も、**up-to-date** な知見の習得に有益であったとの評価を受けました。

一般演題はすべてポスター展示でお願いしましたところ、82題とこれまでにない多数の演題を頂きました。いずれの演題も貴重な症例や臨床研究ですが、その中から金賞に、

笹川征雄先生の「靴の中の気候と足白癬」が選ばれました。さらに銀賞2人、銅賞3人が選ばれ、それぞれ表彰状と副賞の賞品が授与されました。多忙な臨床の合間になされた各先生のお仕事に、心から敬意を表します。

また本大会と並行して、4月22日午後2時より「高齢者にみられる皮膚病」をテーマに市民講演会が開催されました。褥瘡や疥癬に関連する講演に、会場から活発な質問があり、皮膚疾患に対する日臨皮の啓発活動として、一定の成果があったものと考えました。

日臨皮では学術的な側面のみならず、会員相互の交流や親睦を図ることも大切です。懇親会では数々のアトラクションを楽しみながら、準備した九州各県の郷土料理を賞味して頂きました。

おわりに

東日本大震災以来、日本中が自信をなくしているように感じます。しかし今回の大会を通じて、共に学び、語り、また懇親を深めることで、皮膚科医としての「絆」が確認出来たと信じています。今後大学や病院の若い皮膚科医が多数日臨皮に参加され、これからの皮膚科診療を一緒に考えていく環境が整うことを願いながら、第28回日臨皮総会・臨床学術大会の報告を終わりたいと思います。